

野
村
萬
斎



「狂言」と「オリンピック・パラリンピック」には相通じる精神がある。

M A N S A I

N O M U R A

狂言師

小中高を通して 学校生活を謳歌

僕は小学校から高校まで、現在の筑波大学附属に通っていました。小学生のころは目立ちたがり屋で、授業中はよく発言し、体育でも大活躍。でも、なぜか学級委員にはなれなくて、その理由を担任の先生に尋ねたことがあるんです。すると「人をからかうような笑い方がいけない」と指摘されましたね。その先生は道徳が専門だったこともあり、やや思いやりに欠けていた僕の性格を叩き直してくださいました。後に、念願かなって学級委員になれたのも、中学校で人気者になれたのも、その先生のおかげです。高校では、中学校から始めた部活のバスケットボールにさらに打ち込むようになり、さらにバンドも組んで稽古以外の時間はエレキギター三昧。1つ年下の彼女もできて、まさに「青春を謳歌する」を地で行く高校生だったといえます。主体性を重んじる自由な校風だったので、高校でありながら大学のような雰囲気がありました。「自ら考える力」は高校時代に育まれたように思います。ちなみに、当時の彼女は、今、僕の奥さんです。

数年前、バスケットボール部の顧問の先生に、久々にお会いしたのですが、僕の多岐にわたる仕事ぶりをとても褒めてくださいました。先生に認められるというのは、何歳になってもうれしいものですね。

「狂言のための狂言」から 「広い世界につながる狂言」へ

狂言の動きや声の出し方には「型」つまり様式、決まり事があるのですが、僕の場合は師である父に、この「型」を徹底的に教え込まれました。何度も同じことを繰り返すことで、僕の体にさまざまな「型」がプログラミングされていくわけです。稽古が苦痛で父に反発したこともあります。でも、お客さんの反応を肌で感じられる本番は大好きでした。高校生になってからも「やらされている感」はあったのですが、父の『三番叟』はとて格好よく、密かに憧れていました。当時の僕は、マイケル・ジャクソンのダンスやモーリス・ベジャール振付のパレエ『ボレロ』に魅了されていて「狂言でそれに匹敵するのは『三番叟』だな」と思っていたほどです。そんなときに『三番叟』を初演させてもらえることになり、厳しい稽古にも積極的に取り組むようになりました。結果的に、狂言師としての



技術が飛躍的に伸びたと思いますし、本番では未体験の高揚感に包まれたんです。そして、そのときの写真を見た黒澤明監督が僕を見初めてくださり、映画『乱』への出演が決まりました。それまで、僕にとっての狂言は「狂言のための狂言」でしたが、初めての『三番叟』を機に、「広い世界につながるための狂言」になったのだと思います。

自分とは？ 狂言とは？ 問い続けた留学時代

1991年にイギリスで開催された「ジャパン・フェスティバル」では、シェイクスピアの戯曲を狂言に翻案(*)した『法螺侍』という新作狂言を父・万作の演出で上演し、高い評価をいただきました。狂言とシェイクスピアの相性の良さを確信した僕は「狂言の技術を駆使し、シェイクスピアの古典を現代に蘇らせるには演出をより学ぶ必要がある」と考え、1994年から1年間イギリスに留学したのです。演出を学ぶ以外にも、イギリスでの生活は「自分とは何か？」「狂言とは何か？」など、多くのことを客観的に見つめ、考えることにつながりました。そのときに得た気づきが、今の自分の考え方にも大きく影響しています。私の人生においても大切な一年間でした。

ちょうどそのころ、日本では児童や生徒が「きれる」という言葉が使われはじめ、「何がきれるんだろう？」と僕なりに考えた結果、「堰が切れる」という言葉に起因しているように思えたんです。ダムが決壊した状態が「きれる」なのだとしたら、ちょろちょろであっても内在するその子のエネルギーを放出させる必要があると思いました。

僕が取り組んでいる「狂言ワークショップ」には、狂言の型を通して自己表現することが、自己発散の一助になるようにとの思いも込められています。

※翻案：新たな形式や目的に沿って、原作を改作すること

人も自然も含めて 「この辺りの者でござる」

狂言の多くの演目は「この辺りの者でござる」という第一声で始まります。このセリフは、場所や時代に関係なく「あなたも私もこの辺りの人たち」という、その場にいる全員がフラットな関係であることを示唆しています。したがって、登場人物はどこにでもいる人たちで、描かれている出来事も、小さな嘘に人々が翻弄されたり、お酒に酔って失敗するなど、現代人にも共通する日常の一コマであることがほとんどです。狂言とは、そうした出来事を笑い飛ばし、「人間って滑稽で憎めないよね」とか「人間って、悪くないよね」といった境地に導いてくれる「人間賛歌の舞台」だと僕は考えています。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開閉会式では、演出の総統括責任者を務めさせていただきましたが、「この辺りの者でござる」という狂言の精神は、演出におけるポイントの1つになっています。太陽を象徴する聖火のもとでは誰もが平等であるという意味で、狂言に相通じるものがあるのです。また、古来より日本には「八百万神」といって、万物に神が宿るという考え方がありますよね。人も自然も個々は多様だけれど、人も自然も「この辺りの者」であり、「尊い存在」ということ。今、盛んに言われているダイバーシティやインクルージョンの考え方は、日本には昔から存在してきたということを含めて表現したいと思っています。



「翁」三番叟・野村武司(現・萬齋)披キ(※)1984年1月 提供：万作の会
※披キ：演じる際に師匠の許可が必要な演目を初めて演じること

野村萬齋(のむら・まんさい)

1966年、東京都生まれ。祖父・故六世野村万蔵及び父・野村万作(人間国宝)に師事。重要無形文化財総合指定者。1970年、3歳で初舞台。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外で多数の狂言・能公演に参加する一方、現代劇、映画、テレビドラマ、NHK『にほんごであそぼ』などにも出演。1994年、文化庁芸術家在外研修制度により渡英。2002年より世田谷パブリックシアター芸術監督。芸術祭新人賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、芸術祭優秀賞、毎日芸術賞千田是也賞など、受賞多数。
主宰公演「狂言ござる乃座60th」を10/26(土)・30(水)国立能楽堂で開催。
問合せ：万作の会 <http://www.mansaku.co.jp>

わたしの
イチオシ!



クイズ(P31) 正解者の中から
抽選で1名様に、野村萬齋さんオススメの
「巴裡 小川軒 レイズン・ウィッチ」を
プレゼントします。ふるってご応募ください!

わたしの心にある風景



【 夕日に染まる赤い富士山 】

心に刻まれている風景はたくさんありますが、夕日に染まる赤い富士山が特に印象に残っています。それまで、赤富士というのは、葛飾北斎が「凱風快晴」で描いたフィクションだと思っていたので、実際にそう見えることがありと知り、とても感動しました。同時に「同じものであっても、『どこから見るのか』『いつ見るのか』によって、見え方は変わる」と、富士山に教えられた気がしましたね。「赤富士」というのは、本来、朝日に照らされた赤い富士山を指すようですが、夕日に染まる赤い富士山も素晴らしいですよ。